(1)
昭和42年2月24日関鉄東局特別扱承認新聞紙第490号
昭和40年8月8日第三種郵便物認可（毎月5日、15日、25日発行）
1968年2月15日　第124号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆日本革命をアジア革命の勝利と
世界革命の突破口とせよ！
共産主義者同盟

2月15日
第124号
編集発行人　杉村宗一
一部 20円
購読料 20回 400円
1部 400円 800円
2部 700円 1400円
3部以上 300円 600円
（1部に付）

戦旗

戦旗社
東京都文京区湯島2丁目3－3（加藤ビル内）
電話代表（814）1635
振替（東京）26110
大阪支局
大阪市福島区鷺洲上3－3（上賀ビル内）06（458）0235
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128－29 電（70）0025
名古屋支局052（761）1938
静岡支局 0542（45）8639

☆反帝闘争の旗の下侵略と抑圧に抗し
生活と権利を実力防衛せよ！
☆プロレタリア永続革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！

中大闘争勝利！ 野戦病院開設実力阻止！

全学連・反戦の総力を結集せよ！

昨年秋の羽田闘争からエンタープライズ反対闘争の展望を切り開いたわれわれは、さらにその展望を巨大に切り開くために、二月～三月の闘争方針を明確に設定し、全学連・反戦の総力を結集した前進を闘いとらなければならない。

任務は何か

われわれの任務は、第一に二月二日に予定されている中大学の入学試験を実力で阻止し、中大学費値上げの全面粉砕を闘いとることである。そのために、中大学生大衆の巨大なエネルギーを主体とし、全学連の総力を結集した力によって、中大バリケードを官憲の攻撃から実力防衛する徹底闘争を二月二日に至るまで貫徹しぬくことである。

今や中大闘争は、たんに一中大学の次元をこえて、日本学生運動総体と佐藤自民党政権・国家権力との最も鋭く衝突した対決点を形成している。

したがってここにこそ、現に闘われている北海道大学以下三校の学費闘争の帰すうがかかっていると同時に、さらに今後の授業料値上げ問題と大学教育の全面的すうがかかっている。

中大闘争はさらに、学生運動の次元をこえて、羽田―佐世保と続いた国家権力と反権力との社会的対決の焦点をなしているのであり、この社会的対決における中大学生大衆を主体とし全学連の総力を結集した実力抵抗の貫徹こそ、佐藤自民党政府・国家権力に迫る反帝反政府闘争の展望を一段と鋭く切り開くであろう。

われわれの任務は、第二に三月十日に予定されている北区王子野戦病院の開設を阻止するために、反戦、全学連の総力を結集し長期実力抵抗闘争を組織することである。

・その闘いによって、ベトナム侵略戦争をさらに発展させるとともに、その闘いをベトナム侵略加担に全面的に結び切っている佐藤政権実力打倒の方向に転中・転化させ、そのことによって、三月末三里塚新滑走路ホーリング実力阻止闘争への展望を具体的に切り開かねばならない。

中央大学入試を実力阻止し、学費値上げを全面粉砕すること、そして北区王子野戦病院開設実力阻止闘争を、反政府闘争に発展させること、そのために、全学連・反戦の総力を結集し、不屈の実力抵抗闘争を持続貫徹すること――われわれは、この任務を断固として完遂しなければならない。

情勢の特徴

このような三～三月におけるわれわれの任務は、まさにターニングポイントの闘いへとつき進みつつある国際情勢をふまえた場合、より一層明白であろう。

現時点の日本における政治情勢の特徴は、第一に、七〇年安保に向けての政府自民党の政治姿勢と政治路線がより一段と〝露骨〟に示されたことである。

それゆえ、「沖縄返還は両三年以内、その両三年とは、ベトナム戦争終結後。沖縄問題についての白紙とは、核付き返還をありうる」という外務次官牛場の発言であり「原潜や武力のバックのない外交は他力本願。現行憲法はメカケ」という佐藤の沖縄問題についての白紙とは、核付き返還をありうる」

※警視庁は、十二日警察会議長に対し、「大学側の出動要請がなくても学内出動ができる」という答弁を引出した。これは、「大学側の出動要請」が、大学当局の学生弾圧と公然たる権力的介入の体制に入った。

国家権力が、そのわずか二日前に発表された国大協路線―「やむをえない時には警官導入」を、踏み台としてさらに官憲的介入へとつき進んできたのは、まさに中大を先頭として学園闘争が、大学当局の学生統制機構を麻痺させ、大学当局の生存を根底から脅かす巨大なエネルギーをもっているからである。

中央大学当局の生存は二十一日の入試を遂行しうるか否かの一点に絞られてきている。まさに卒業試験延期を踏いとった二千名の行動隊を中心とする中大学生大衆の入試を阻止を実現する巨大な可能性を秘めている。

早大・明大に続いた学園闘争は今や羽田―佐世保闘争をとおして新たな段階に入った。

中大当局の生存を維持し、麻痺しているこの学生大衆に対する理事会理事会は、教授会の分配と統制の体制の巻き返しをはかる反革命である。

大学当局と権力に対する中大学生大衆の巨大な反逆のエネルギーを主体とし、さらに全学連の総力を結集することによって、権力の介入を実力打撃し、学生大衆に対する学生当局・理事会の統制体制を実力で破砕・学費値上げ全面粉砕を闘いとり、中大闘争勝利！野戦病院開設実力阻止！

中大学費値上げ全面粉砕！

理事会発表のいっさいの幻想を排し

学費値上げ全面粉砕！

大衆的武装闘争で

入試阻止をかちとれ！

最後までバリケードを死守せよ！

機動隊導入・大量処分を許すな！

共産主義者同盟中大細胞

理事会・教授会による学生大衆に対する支配統制機構を実力によって麻痺させて前進してきた中大闘争は、今や国家権力の弾圧体制と正面対決する段階に入った。

こうした中において、中大教授会と日共民青は「機動隊導入反対」「白紙撤回」「値上げ発表以前への振りもど」・話し合い」に動いている。

だが、こうした「白紙撤回」や「値上げ」延期は、中大学生大衆を武装解除する反革命であり、入試

中大学費闘争は、十四日の大学当局の「四十三年度は学費値上げを実施しない」という発表で新たな局面にはいった。だが社学同を中心とする昼間部自治会および学生大衆は、学費値上げの「全面実力阻止」をめざして帝国主義と国家権力への、非妥協的対決の闘いへとつき進みつつある。

当局の値上げ一年延期と バリケード撤去要求

中央大学当局（飯田甲子郎理事長代行、井上達郎学長）は十四日一時配信会見し、

①四十三年度は学費値上げを施しない

②これは機動隊導入という最悪の事態をさけ、入試を行うためである

③値上げ案そのものは生きており、値上げの白紙撤回ということではない

と発表した。

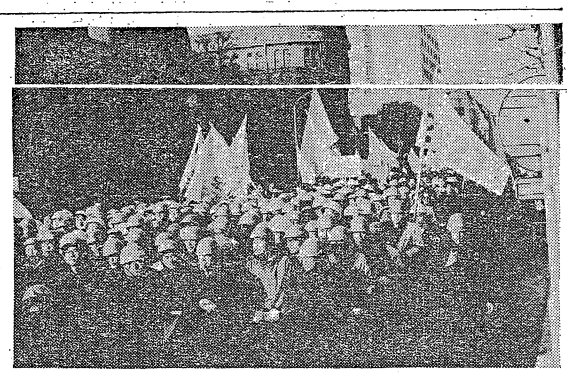
つづいて午後四時、昼間部自治会あてに次の二点を文書で通告した。

「①四十三年度は学費値上げを実施しない、②バリケードは不法であるから十六日午後一時までに撤去すること。

中大学費闘争連絡会議は、これにたいして大学当局の発表の欺瞞性を糾弾、午後四時から大講堂に三千名の学生の結集のもとに集会を開き、次の二点を理事会に質問することを満場一致で決定した。

「①「四十三年度は実施しない」というが、四十四年度以降の値上げについてはどうなのか。

「②バリケードは不法」という



理事会発表のいっさいの幻想を排し

学費値上げ全面粉砕！

大衆的武装闘争で

入試阻止をかちとれ！

最後までバリケードを死守せよ！

機動隊導入・大量処分を許すな！

共産主義者同盟中大細胞

が処分については、はっきりさせるべきである。われわれは、この提案の欺瞞性と陰険な分裂策動、機動隊導入の本音を見抜かねばならない。

値上げの延期は文字通り「延期」であって、「撤回」ではない。しかも来年は値上げすることを公言し、かつ、学生大衆に対しては、バリケードが「不法」であるときわめて高姿勢でおさえし、期限付き撤去を命令している。そこには、学生大衆の要求を無視して一方的に学費値上げを強行するとしたことへの「自己批判」は一片たりとも見られない。これこそ、この不正の「値上げ」に他ならず、民青派や一部三年生大衆の分裂を策しながら、武装解除をねらい機動隊の導入、闘う部隊の粉砕をねらっているのである。

従って、いまだなんら勝利ではない。このような欺瞞を許さず、闘いの本質を再度確認し

戦線をさらに強化せよ！

そもそも、中大学費闘争は、たいへんな値上げ阻止の闘いとして取組まれてきたものではなかった。それは、大学当局が、学費値上げを煽ぶり、打ち出してきた教育政策の内容が、七〇年安保を契機として日本帝国主義が全面的な攻撃として仕掛けてきた「帝国主義的社会政策の再編」の一環に他ならなかったからである。このことを大衆的に把握した闘う〝中大人民〟は「学費値上げ」という一つの政策をそれだけとり出して、個別的になんとかふせぎ分離することを迫られていたのであった。

このような観点で、闘う団結をかちとり、帝国主義権力と大学当局に対する強力な闘地を構築しつつある中大においては、学費値上げ実力阻止闘争は、単なる〝白紙撤回闘争〟ではない。

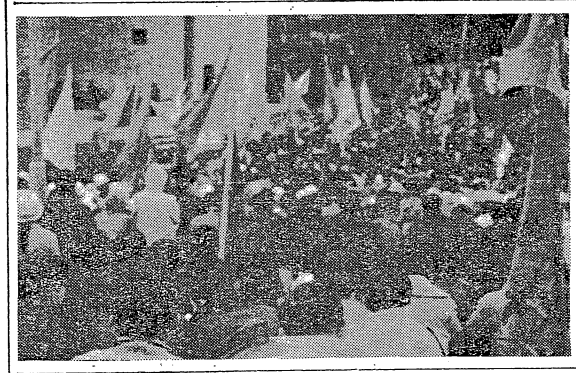
社学同を中心とした学費闘争連絡会議は、まず今回の「値上げ延期」の三点を媒介として、一層強固にバリケードを守りぬかねばならない。

したがって自らの闘いを七〇年安保粉砕闘争にむけた全人民的政治闘争の一環として闘い、なかんづく、当面の野戦病院・成田闘争として開始され、今秋～春の無期限ゼネストと大衆的武装闘争として準備されるべき、六九年三月の佐藤訪米阻止闘争から七〇年に至る闘いへの飛躍の場として中大学費ストライキを永続的に闘いぬき、中大を全学連・地区反戦の革命的強化の陣地としてかちとることであるから十六日午後一時までに撤去すること。

中大学費闘争連絡会議は、これにたいして大学当局の発表の欺瞞性を糾弾、午後四時から大講堂に三千名の学生の結集のもとに集会を開き、次の二点を理事会に質問することを満場一致で決定した。

「①「四十三年度は実施しない」というが、四十四年度以降の値上げについてはどうなのか。

「②バリケードは不法」という



二月十一日、東京反戦青年委員会と都学連による建国記念日反対中央集会が、日比谷野外音楽堂で開かれた。当日朝から野音のすぐ隣にある日比谷公会堂において右二月十一日、日比谷野外音楽堂に結集した反戦、全学連

反戦・全学連三千起つ

2・11建国記念日反対中央闘争

翼諸団体が「祝賀集会」を開いており、公園内ではすでに機動隊が警備体制を固めていた。

十二時過ぎ頃から、雪風をついてヘルメットをかぶった学生のデモ隊や反戦の労働者が結集しはじめた。開会は午後一時の予定であったが、当日午前から中核派学生が、革マルを排除するために、ヘルメットとコン棒で会場の最前列を占拠し、開会は一時間遅れた。

反戦七千名、都学連・全学連二千名が会場に結集した午後二時頃東京地区反戦世話人会は「異なったイデオロギーの部分を排除しないことを確認し、当初の議事次第を変更して集会を始めた。

司会の樋口君（東京地区反戦）が、まず世話人会の確認を報告した。次いで議長団の選出、全国反戦なごのあいさつが続き、全学連秋山委員長が佐保闘争報告アピールを読みあげた。また学費闘争の最終的決戦を目前にした中大学費闘争連絡会議から田村議長が「最後の決戦を断固として勝利的に闘いぬく」と力強く訴えた。そしてスローガン採択、集会宣言、東京地区反戦青年世話人による行動方針提起をもって、四時、都学連・全学連のヘルメット部隊を先頭に勢いよくデモ行進に入った（そのとき中核派学生は自己用意してきたプラカードを全部投げ捨てた）。

この日のデモに対し東京都公安委員会は、反戦部隊に関しては首相官邸コースを認めながら、全学連は認めないというきわめて陰険な弾圧を出した。

闘いの本質を再度確認し

戦線をさらに強化せよ！

そもそも、中大学費闘争は、たいへんな値上げ阻止の闘いとして取組まれてきたものではなかった。それは、大学当局が、学費値上げを煽ぶり、打ち出してきた教育政策の内容が、七〇年安保を契機として日本帝国主義が全面的な攻撃として仕掛けてきた「帝国主義的社会政策の再編」の一環に他ならなかったからである。このことを大衆的に把握した闘う〝中大人民〟は「学費値上げ」という一つの政策をそれだけとり出して、個別的になんとかふせぎ分離することを迫られていたのであった。

このような観点で、闘う団結をかちとり、帝国主義権力と大学当局に対する強力な闘地を構築しつつある中大においては、学費値上げ実力阻止闘争は、単なる〝白紙撤回闘争〟ではない。

社学同を中心とした学費闘争連絡会議は、まず今回の「値上げ延期」の三点を媒介として、一層強固にバリケードを守りぬかねばならない。

したがって自らの闘いを七〇年安保粉砕闘争にむけた全人民的政治闘争の一環として闘い、なかんづく、当面の野戦病院・成田闘争として開始され、今秋～春の無期限ゼネストと大衆的武装闘争として準備されるべき、六九年三月の佐藤訪米阻止闘争から七〇年に至る闘いへの飛躍の場として中大学費ストライキを永続的に闘いぬき、中大を全学連・地区反戦の革命的強化の陣地としてかちとることであるから十六日午後一時までに撤去すること。

中大学費闘争連絡会議は、これにたいして大学当局の発表の欺瞞性を糾弾、午後四時から大講堂に三千名の学生の結集のもとに集会を開き、次の二点を理事会に質問することを満場一致で決定した。

「①「四十三年度は実施しない」というが、四十四年度以降の値上げについてはどうなのか。

「②バリケードは不法」という

2・20、26王子キャンプへ怒りのデモを

野戦闘争体制進む

日共のセクト主義粉砕し

救援カンパを訴える

羽田・エンタープライズ闘争　救援対策委員会
（戦旗社気付）振替口座（東京）八二七四九

処分を撤回

医師法改悪粉砕と、大学当局による42名医学生に対する研修医約三項目貫徹のための医学部長、学生部長による処分撤回を求める医師・医学生・医学部自治会の抗議に対して、大学当局は、「異議申し立ての場を設定する」と言明しながら、一方的に処分を強行した。

今回の処分は、当局の事実誤認の「告示」を、学生が一時保留したことに端を発し、一事務官僚の証言を全面的に受け入れて強行されたものである。

また、同様に「登録医制」反対でストライキに突入している大学に、東大、新潟大、神戸医大、阪大、岡山大、大阪市大、京都府立医大がある。

静大百五十名決起

2・11四名不当逮捕さる

静岡大では、社学同を中心とする学生百五十名が建国記念日反対に決起した。ほとんど全員がヘルメットをかぶり、プラカード手にして県庁前に結集。総決起集会を開いたのち戦闘的デモンストレーションを展開した。廃業会館前で待ちかまえていた機動隊がデモ隊に襲いかかり、四名を不当逮捕したことに端を発し、一事務官僚の証言を全面的に受け入れて強行されたものである。

また、同様に「登録医制」反対でストライキに突入している大学に、東大、新潟大、神戸医大、阪大、岡山大、大阪市大、京都府立医大がある。

高校生会議百五十名起つ

十一日午後、社会文化会館で「高校生会議」に結集する先進的高校生百五十名が、「戦国記念日反対、反動文教政策粉砕」の集会を開いた。岩田弘氏の講演をきき二月二十日の野戦病院反対斗争（高校生集会→反戦・全学連のデモに合流）を確認して、三時半デモ出発。シュプレヒコールをくりかえしながら官邸、文部省に抗議行動を展開した。途中、米大使館前で反戦青年委のデモと合流した。

三里塚

政府・公団の挑戦に抗し 最後の闘争体制固め

一月三十一日の旗一色決起大会において空港公団田分宅に対する実力抗議闘争をかちとった現地反対同盟は、三月決戦を目前にして、公団員を敷地内に一歩も入れないために青年同盟を先頭にパトロール体制を強化している。そして公団の宣戦布告、二月四日地権者会神崎会長の「所有地内の立ち入り調査を認める」という反動的声明に対し、五日早朝、五十名の反対同盟農民が声明撤回を迫って抗議闘争を行ない、公団の手先＝神崎会長に激しくつめよった。

だが地権者会内部においても、下部は、公団との地価の交渉の行詰り、代替地造成の不備などのために、幹部と公団に対して強い不満をうっ積させている。また九日条件派の家屋調査に来た公団下請け建築業者三人が発見され反対同盟員によってたたき出された。

現地反対同盟は、権力との真正面対決に向けて、空港設置実力阻止のため最終的な意志統一と体制固めの段階にはいっている。

芝山反対同盟 全員当選

十四日の芝山町議選挙で、反対同盟推せん者九名全員が当選し、圧倒的な支持を獲得した。空港設置賛成派は十一名当選したが、この中には条件派の動揺分子が二、三名含まれており、町議会内部の勢力関係は大きく流動することになった。

高校生会議百五十名起つ

十一日午後、社会文化会館で「高校生会議」に結集する先進的高校生百五十名が、「戦国記念日反対、反動文教政策粉砕」の集会を開いた。岩田弘氏の講演をきき二月二十日の野戦病院反対斗争（高校生集会→反戦・全学連のデモに合流）を確認して、三時半デモ出発。シュプレヒコールをくりかえしながら官邸、文部省に抗議行動を展開した。途中、米大使館前で反戦青年委のデモと合流した。

野戦闘争体制進む

日共のセクト主義粉砕し

救援カンパを訴える

羽田・エンタープライズ闘争　救援対策委員会
（戦旗社気付）振替口座（東京）八二七四九

社会党第三〇回大会と七〇年闘争（下）

地区反戦を全国に組織し 反帝統一戦線を強化せよ

佐々木和雄

現地・首都を両軸に激しく闘われたエンタープライズ闘争は、現在、全国総戦線、とりわけ、労組青年活動家に動揺と一部の活性化を生みだしている。昨春の砂川闘争に始まり、一一・二羽田闘争と激しいエンタープライズ闘争を闘い抜いた 地区反戦・全学連の 反帝統一戦線は、社共の無力性をあばきつつ、戦闘的気風を日本帝国主義闘争に惹起させつつある。

一、問題は何か

一月十七日、首都東京で地区反戦・全学連は二万二千名を結集して戦闘的デモをかちとり、同二十日、社会党総議の五千名に対して七千名を結集して、首相官邸・アメリカ大使館デモを敢行した。そして共産党は、一〇・八「赤旗まつり」一一・二「全国青年スポーツ祭典」という戦線逃亡で、昨年、すでに、「赤旗」発行部数と党員数の減少をきたしたが、エンタープライズ闘争で、さらに破綻をあらわにした。共産党の全学連に対する〝武装反革命〟の企ては大衆の大憤激を買い憤怒した佐世保市民は、この〝機動隊の補助部隊〟を〝武装解除〟したのである。

口先だけの社会党は、一月二四日から開催の第三〇回大会が示すとおり、下部青年党員の激いつきあげをくらっている。甚だしだったかりの「中期路線」（築金主義と カンパニア闘争）は、現実のきびしい階級闘争に病いは一無力性を暴露され、たちまち宙に浮き上がってしまった。

ところでわれわれが、ここで確認しておかなければならないことは、かかる事態は、わが反帝統一戦線の前進によってもたらされたものであるが、それはあくまでも〝局面としての事態〟であって日共が大衆から完全に孤立されたといいきれるものでもなければ、また、社会党が左傾化したといいきれるものでもない。

われわれは、われわれの前進によってかちとった地歩をうち固めつつ、『七〇年安保を反戦闘争の一大焦点として闘い、プロレタリア日本革命と世界革命の展望を切りひらく』ために、反帝統一戦線の強化と社共との対決を七〇年安保射程におさめた戦略的課題に高め、その方針を確定しなければならない。

二、地区反戦の任務

日本社会党は〝特殊 日本型 社民〟といわれるように、社民政党一般とは異なる独特の戦闘性をもつつづけてきた。だがそれは、理論の階級的帰結というよりも、すぐれて構成実体の現実感覚の直接的反映であった。それゆえわれわれが社会党の（一般に社民の）今後の展望するに際して必要なことは、何よりも社会党の構成実体の現実的な姿であり、彼らに対する保守・中間層の動揺・分裂・再編成の過程を、この過程で大衆的批判ではなく、彼らの階級的実体の暴露を通じて、組織的に対決し、彼らの階級的実体を暴露し、彼らの裏切りを